

10. 古墳時代のはじまり

古墳時代のうち、卑弥呼が亡くなったころから古市古墳群や百舌鳥（もず）古墳群がつくられる直前までを古墳時代前期と呼びます。ちょうど3世紀後半から4世紀にあたります。前期の古墳からは、三角縁神獣鏡をはじめとする数多くの鏡、緑色の石でできた腕輪形（うでわがた）石製品（せきせいひん）などが出土します。鏡は、自分の姿を見るためではなく、神まつりやまじないに使う道具だったと考えられます。したがって当時の大王や豪族は、呪術者的な性格が強かったと推測できます。この点は、5世紀の古墳時代中期になると鉄製のヨロイ・カブトが多く出土することから、大王や豪族は武人的な性格が強まったと考えられることと対照的です。

博物館では当時の副葬品として、茨木市紫金山古墳から出土した三角縁神獣鏡などを展示しています。三角縁神獣鏡は、卑弥呼が中国からもらった鏡の一種とする説もあります。三角縁神獣鏡をめぐる説は様々ですが、当時の大王と豪族のつながりを理解するうえでとても重要な副葬品といえます。